
山形／進路相談

阿毛池吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山形／進路相談

【Nコード】

N4146Q

【作者名】

阿毛池吉

【あらすじ】

女子中学生の山形は今年、受験生。

彼女はレベルが高い高校も難なく通る成績で、進路相談も問題なく終えると思われた。

だが、担任の先生に提出された進路希望調査はなんと白紙。これから始まる進路相談。

彼女は何を考えているのだろうか。

(前書き)

去年に書いてみた短編小説。

文章力がつたなさすぎるが、去年のものだけに今始まったことでもない。

あなたの優しい心でカバーして頂けるなら
読んでください。

「……がた」

私は先生の顔を身動きもせず見ていた。

「山形」

名前を呼ばれて何度目で我に返ったのだろうか。

「山形。話、聞いてたか？」

「はい」 もちろん聞いていない。

私にはもう先生の顔を見ることができなくなっていた。今できるのは俯くことだけだった。

「うーん……」

先生は頭を傾げた。先生は多分私のことを呆れているだろう。実際、私は先生に迷惑をかけているだけなのだから。

自分の膝を見ながらも先生がどのような顔をしているかはだいたい検討がついている。それを考えるとなおさら震えがこみ上げてきた。私はこらえようと手をギュッと握りしめた。

しばらくの沈黙に先生のギィとイスを引く音。

座り直したイスの音が先生と私しかない教室に鳴る。顔を上げ

ると先生のまつすぐな目がこちらを見据えていた。

「あのな。先生は山形の将来を真面目に考えて云ってる。でも山形が黙っていては話が進まないんだ」

担任の先生は今年教師になった。今時珍しく生徒に熱心で、一人ひとりをしっかり見ている。また、さわやかで、人望はあって、イケメン。

生徒から見ても文句のつけようのない立派な先生と云える。

「進路希望。白紙のまま。山形の成績なら御屋高校だって余裕で行けるはずだ。なのに……どうした？」

先生は評判がよく、そして人気だ。先日、先生がひったくりをやったという噂で女の子たちがキャーキャー騒いでいたし、なんでも友達的美佐子は「先生でご飯6杯いける」とか何とか。

「……んー……」と先生は首筋をかいいた。

先生は困ったことがあると首筋をかく癖がある。私は見るや否や目をそむけた。見れる訳がない。

「……山形。おまえ、困っていることとかないか？」

困り事はないが。

「頭を悩ませていることとか」

悩むまでではない。ないけれども気になってしょうがないことがある

った。

先生がこの学校に着任してから。

すぐに友達が先生のこととで、「かつこいい」やら騒ぎ始めたが私は何ともなかった。強いて云えば、席が一番前だということに羨ましがられて疲れたことぐらいだった。

そんなある日。

一番前という席で発見があった。

それが初めて先生が困って癖を見せたとき。

あの席だからこそ、本当の先生を見ることができたのだ。今でもあのときのことを容易に思い出すことができる。

あれから私は授業中にいつも先生を見ることにした。そして先生を知りたいと思った。だからこそ、どんな情報でも訊き集めた。

しかし、集めれば集めるほど私の中で靄が広がるばかりだった。靄は日がたつにつれて、私の中で震えだし、いつしかそれを公言したいと思うようになった。

それは先生やみんなのことを考えると云うえることではなかったし、この云いたいという気持ちを抑えることにも限界があった。

一般的にこれを悩みとでも云うのか。

かくして私はこの靄をすっきりさせるため、先生と二人きりの時間を作り、進路希望を白紙にして先生を困らせた。おかげで先生は呆れているかもしれないけど、靄は晴れた。

確認した。

けど……

けれど、云いたいという気持ちは今になっても変わらなかった。気がつけば自分はまだ微かに震えあがっている。私は今まで以上に手を強く握りしめた。

「山形。顔上げろ」

先生はやっぱり首筋をかきながら優しくこう云った。

「山形。先生でよければ悩みを聞くから」 先生の綺麗すぎる前髪が動く。

マズイ。

先生の優しい言葉によって言葉が喉元まで込み上げてくる。

「云ってみろ」

「……いんですか？」

云ってしまえばアレに気づいたことを張本人に話してしまうことになる。

「……云っていいんですか？」

「ああ。云ってみろ」

そして私は先生の「楽になる」という言葉に耐えきれなくなり告白した。

先生。

「ズラ、ずれてます」

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4146q/>

山形／進路相談

2011年1月28日02時25分発行